

マダガスカルでは、ことわざが一般会話の中によく使われている。たとえば、貧困状態で何かしようと思っても絶対無理なことを示したいとき「赤土は燃えない」と言う。また、現場やその近くにいる人が一番に行動すると言いたいとき「鍋の近くはすすだらけになる」と言う。それから、偶然ではないことを示すとき「鉄は単独では鳴らない」と言う。ラジオのコマーシャルではイベントの案内の中に「バッタは二度と門に泊まらない」と出る。などなど、みんなが言いたいことを直接言わないで、代わりにことわざを使って会話をする。

なぜそうなのかお話しする前に、上記のことわざでわかりにくいところを説明する。バッタは豪華なご馳走だった。バッタの大群がたまに村の門のところに来て一晩泊まる。翌朝移動し、絶対戻らない。その夜はバッタを捕るのに絶好の機会である。要は、絶好のチャンスがあるときにつかまないといけないということでそのことわざがイベント案内に使われている。「赤土は燃えない」については、遠い山の赤土の部分が山火事にみえるが単なる赤土である。一方、赤土はやせている土地なので貧困を表すものである。何もなければ何もできないということである。

なぜ一般会話の中でことわざが使われているかを考えてみた。もちろん、昔からの習慣という当たり前の理由はあるが、浮かび上がったのは「カバリー」のことである。カバリーは多くのことわざをうまく使ったスピーチである。結婚式、葬式、出産祝い、割礼、ファマディハナ<sup>1</sup>やヒラガシ<sup>2</sup>など多くの伝統行事や儀式のときに必ず行う、高いレベルのことわざ知識を求められたスピーチで、話し手だけでなく聞き手も、ある程度の理解能力を持たなければいけない。結婚式では下手なカバリーをしたら、お嫁さんをもらえないということもある。そうやってみんなは生活の中でことわざを使って覚え、カバリーの能力を身に着ける。学校に行ったことがなく、ずっと田舎で生活していた叔父のスピーチが未だ印象的である。現在も伝統行事に限らず様々な機会のことわざを盛り込んだスピーチが一般的である。

わかりやすくなるように、カバリーの一部を紹介する。お嫁さんをお願いするときの最初の挨拶である。マダガスカル語の単語をそのまま残しながら、日本語に訳すのは難しかった。新郎側が話している。家族の絆を強調して、謙遜した態度を取っている。その関連のことわざに注目しながら、各場面でなぜそのことわざを使うかを考えてみてください。

「みなさん、私たち一族がここに集まり、他の子孫がいなく、(家族は)生きていて一つの家に住み、死んだら一つの墓に入ります<sup>3</sup>。(人間は)鍋のふちのようにぐるっと一回り一緒に、(人間は)水面のように低いのも高いのありません<sup>4</sup>。私たちは声を掛け合う他人同士ではなく、話し合いをする兄弟です。わなを仕掛け合うスピーチをするつもりはなく、家族の絆を深める会話をしたいです。そうは言っても、頭のない動物は歩けない、または川には水源があるように、お話しも先頭役者が要ります。なので、私は王族の人を先行する杖<sup>5</sup>ではなく、朝露を払う役割です。布の縫い方のように、後ろのみんなは、切れた綿をつなぎ、薄い部分を足します<sup>6</sup>。」

<sup>1</sup>墓内に安置した遺骨を包んでいる高価な絹や天蚕の布を取り替える祭り。遺骨を別のお墓に移す場合もある。

<sup>2</sup>歌とダンスとスピーチが中心になった伝統芸能。

<sup>3</sup>家族は一つだという意味のことわざ。

<sup>4</sup>人間がみんな同じだという意味のことわざ。色々なものの中で鍋のふちがどんなにまっすぐだったか想像できる。

<sup>5</sup>「王族の人の前に先行する杖になってはならない」ということわざで、偉い人や目上の人への尊敬を表す。

<sup>6</sup>自分の間違いや言い忘れたことをみんなでカバーしようといいたい。お互いの協力の重要性を表すことわざ。

スピーチはまだまだ長いが紹介するのはここまでにする。家族の絆、人間の平等性、相互尊敬、指導者の必要性や協力の重要性というマダガスカルの基本考え方がわかる。

マダガスカルのことわざはかなり古く、原始的な生活の中で生まれ、長年受け継がれてきた。ことわざを紹介する本には2000近くのことわざが記載されていて、その中で近代的な道具を使ったことわざは鉄砲だった。そんな昔からマダガスカル人がことわざを使いながら生活し続けてきた。文化は変化するものだと言われているが、その生活スタイルがずっと残ってほしいと思う。